



学校だより

平成29年10月31日(火)

第767号

さいたま市立日進小学校

TEL: 663-6942

「かかわることをとおして」

校長 並木昌和

度重なる台風の接近により、自然に対する畏怖の念を強く感じさせられた10月でした。秋の深まりとともに本校の教育活動も充実してきました。6年生の修学旅行・「つぼみの日」の中学校訪問をはじめ、多くの学年が校外に出て、教室では学ぶことのできない社会のルールや人のかかわり合いの大切さを、実感を通して学ぶことができたようです。また、就学時健康診断では幼児の世話をすることで、小さな子の側にたって行動することの大変さを、身を持って体験することができたようです。兄弟や姉妹が少なくなっている今、本当に貴重な体験だと思えます。

これらのことは、「集団」に身を置かなければ、もっと言えば「集団の一員としての自分」を意識しなければ学ぶことができないものです。まさに、学校の一員として、学年の一員として、学級の一員として他の人とかかわりながら、一人ひとりが自分を生かす力をこれらの行事から身に付けていくことに他なりません。決して一人でパソコンに向かってばかりいたり、映像を操作したりする仮想体験では得ることができません。それは、文字に現れない表情や雰囲気、言葉の調子などから受ける感情を敏感に感じ取ることができないからです。そうした、他人とかかわる力・コミュニケーション力を子どもたちに着けさせていくことが、大切なことです。子どもたちは仲間と心をつなげたかかわりを深めて成長します。楽しみです。

この時期になるとある年の同窓会を思い出します。皆それぞれに成長し、30代半ばです。結婚している者も多く、子育ての様子などを楽しそうに話してくれました。当時の思い出話や現在の様子などを話しながら、楽しい時間を過ごすことができました。「そういえば先生、Tさんにラーメンと餃子はもうおごりましたか。」と聞かれました。私が担任していた時に子どもたちと『1年間に本を20,000ページ読んだ人には、卒業する時に先生がラーメンと餃子をおごってあげる。』という約束をしていたのです。当時、Tさんだけが見事に20,000ページを読破し、私にラーメンと餃子をおごってもらう権利を獲得したのです。(まったく、怒られた事やこちらの都合の悪いことはよく覚えているものです。)20数年も前の約束です。まだ守ることができていません。責められました。

彼女らと本や活字の話になりました。テレビ、インターネットや携帯電話(スマートフォン)の普及、また、最近では電子ブックの発達で、じっくり物語等を活字で読む機会が激減していること、ニュースさえも新聞で読む必要がなくなり、彼女たちの周りから活字が消えていることをはっきりと感じ取ることができました。このままでは「読書」という言葉もいずれ消えてしまうのではないかと思わなければなりません。

読書は、いろいろと考えて想像したり、時には言葉の美しさや表現の巧みさに感動したりしながら、作者の創作の世界を味わうことができるものです。読書は豊かな感性や想像力を養う上で、極めて大切なものと言えます。心のしなやかな子ども時代の読書は、豊かな心や知性を育てる基になるものです。彼女たちに言いました。「先生も子どもころは読書するよりも外で遊ぶ方が好きだった。けれども、夢中になって本を読んだ時期もあった。君たちの子どもには、どうか夢のある話を読み聞かせてあげて欲しい。それがいつか心の豊かさとなって実を結ぶことになるよ。」と。

静かな秋の夜長、家族で読書をするのもよいのではないのでしょうか。

子どもたちが、心震える、一生忘れることのできないような本に出会えることを望んでいます。